

図書館資料展示

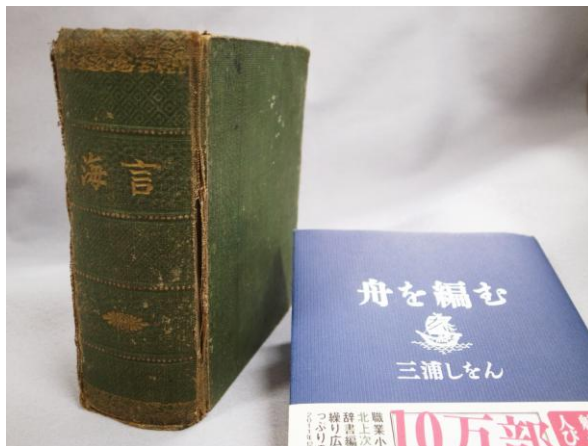
<辞書と事典の世界>

図書館用語のひとつに「参考図書」(レファレンスブック)という言葉があります。「参考図書」とは、辞書、百科事典、ハンドブック、図鑑、年鑑、白書、統計、地図などのように、何かを調べるときに用いる道具のような本のことです。

なかでも、言葉を調べる「辞書・辞典」と、事柄を調べる「事典」(コトテンとも呼ばれる)は最も典型的な参考図書です。図書館の参考図書コーナーには、「広辞苑」(岩波書店)、「新英和大辞典」(研究社)、「世界大百科事典」(平凡社)のほか、「キリスト教大事典」や「物理学辞典」などの各分野別の辞典、「難読語辞典」、「ことわざ辞典」、「カタカナ辞典」、「方言辞典」、「語感の辞典」等さまざまな用途に応じた辞書・事典が所蔵されています。

こうした辞書や事典を編纂するには、たいへんな労力と時間をかけた編集作業が必要です。2012年の「本屋大賞」受賞作『舟を編む』は、そんな編集現場を舞台にした小説です。

また、大学図書館では、図書館ウェブサイトを経由して、「日本大百科全書」、「リーダーズ+プラス」、「国史大辞典」などのオンライン百科事典・辞書にアクセスし、電子辞書のように言葉や事柄を調べることができます。自宅からもリモートアクセスできるものもありますので、辞書編纂の労に思いを馳せつつ、ぜひご活用ください。



『言海』大槻文彦著(1889年1月)立教大学図書館乱歩コレクション所蔵本、『舟を編む』三浦しをん著(光文社2011年)

立教大学図書館

<展示資料>

1. 『類聚名義抄』源順著 永禄9(1566)年 ※名古屋市博物館所蔵本の1992年複製版
2. 『伊呂波字類抄』[橘忠兼著] 10冊 室町初期写
※大東急記念文庫蔵の1977年複製版
3. 『日葡辞書: Vocabvario da lingua de Iapam』長崎版 1603-1604年刊
※オクスフォード大学図書館所蔵本の1973年複製版
4. 『言海』大槻文彦著 [1889年1月] ※立教大学江戸川乱歩コレクション所蔵本
5. 「立教大学図書館オンライン百科事典・辞書リスト」(図書館ホームページより)
6. 「めくるめく辞書の世界」『朝日新聞』2012年4月10日
7. 『舟を編む』三浦しをん著 光文社 2011年(2012年「本屋大賞」受賞作)

※展示解説等については、『日本辞書辞典』(沖森卓也ほか編、おうふう1996)、『日本の辞書の歩み』(辞書協会1996)、『辞典の辞典』(稲村徹元、佃実夫1975)などを参考にさせていただきました。

＜日本の辞書略史＞

文学部文学科日本文学専修 教授 沖森卓也

日本の辞書は歴史的に中国の辞書の影響を大きく被っている。それによって、古代日本では代表的なものとして次のような辞書が作られた(括弧内の数字は成立年代を表す)。

(1)文字の形によって類別したもの(字形引辞書)…『篆隸万象名義』(空海、830～835 頃)、『新撰字鏡』(昌住、898～901 頃)、『類聚名義抄』(編者未詳、1100 前後)

(2)文字の意義によって類別したもの(分類体辞書)…『和名類聚抄』(源順、931～938)

(3)文字の音によって類別したもの(音引辞書)…『東宮切韻』(菅原是善、847～850)

(1)は字書、(2)は義書、(3)は韻書とも呼ばれる。中でも、『新撰字鏡』は掲出した漢字に対応する和語を示しており、漢和字書の体裁を持つ最初の字書である。そして12世紀には、日本語の音節に即した音引き辞書として、イロハ順の仮名引きによる『色葉字類抄』(橘忠兼、1144～1180)が登場するに至った。

中世を通して、前代の辞書をもとに改編・増補された、さまざまな辞書が編集された。その後、近世に入って商業出版が成立すると、字書として『倭玉篇』、イロハ引きの『節用集』を中心に、辞書は庶民にも近いものとなっていった。とりわけ、『節用集』は利用者の便宜を考えて、検索方法にさまざまな工夫が凝らされた。また、意味記述・用例という側面でも充実した辞書も作られ、その代表的なものに『倭訓栞』(谷川士清、1777～1887 刊)、『雅言集覧』(石川雅望、1826～1887 刊)がある。

一方、ヨーロッパの言語との対訳辞書では『日葡辞書』(1603～4)が刊行され、18世紀には蘭学の隆盛を背景に『波留麻和解』(稲村三伯、1796 刊)、『訳鍵』(藤林普山、1810 刊)などが編集された。19世紀になると、最初の英和辞典『諳厄利亞(あんげりあ)語林大成』(本木正栄ら、1814 刊)が編まれ、『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助ら、1862 年刊)のほか、和英辞典では『和英語林集成』(ヘボン、1867 刊)なども刊行された。フランス語関係では、『三語便覧』(村上英俊、1854 刊)、『仏語明要』(村上英俊、1864 刊)などが作られた。



『英和对訳袖珍辞書』堀達之助編(文久2年1862)立教大学図書館大久保文庫蔵、洋書調所から刊行。日本初の英和辞典と言われる。

明治に入ると、官撰の『語彙』が本格的国語辞典を目指して1872年から1881年までにア～エの部を出版したが、その後財政難によって中断した。1875年、文部省は大槻文彦に日本語辞書

の編纂を任せましたが、1886年に完成した稿本は大槻に下賜され、自費出版された。これが最初の近代的国語辞典である『言海』

(1889～91 刊 4 冊)である。その後、国語辞典は『大日本国語辞典』(上田万年・松井簡治、1915～9 刊 富山房・金港堂 4 冊)が高い評価を得、これをもとに『日本国語大辞典』(1972～6 刊 小学館 20 巻)が編集された。また、『広辞苑』(新村出、1955 刊 岩波書店)、『大辞林』(松村明、1988 刊 三省堂)なども刊行される一方、小型国語辞典では『小辞林』(金沢庄三郎、1928 刊 三省堂)が最も古く、その後『明解国語辞典』(金田一京助、1943 刊 三省堂)を経て、『新明解国語辞典』(山田忠雄主幹、1972 刊 三省堂)が編集されたほか、代表的なものでは『三省堂国語辞典』(見坊豪紀主幹、1960 刊 三省堂)、『岩波国語辞典』(西尾実ら、1963 刊 岩波書店)なども出版された。

漢和辞典では、『漢和大字典』(重野安繹ら監修、1903 刊 三省堂)が「漢和」と名乗る、近代的な体裁をもつ字書の先駆けとなり、実質的には柴田猛猪の編である『大字典』(1916 刊 啓成社)は戦前のベストセラーであった。戦後になると、親字約5万を収録する『大漢和辞典』(諸橋徹次、1956～60 刊 大修館書店 12 巻索引 1 巻)が出版された。

英和辞典では、柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』(1873 刊 日就社)、神田乃武・横井時敬・高楠順次郎ほか編『新訳英和辞典』(1902 刊 三省堂)、岡倉由三郎編『新英和大辞典』(1927 刊 研究社)など多くの大型辞書が出版される一方、小型辞典では神田乃武・金沢久共編『袖珍コンサイス英和辞典』(1922 刊 三省堂)を皮切りに続々と出版された。

<各種の国語辞典から>

◆『外辞苑—平成新語・流行語辞典』(亀井肇著、平凡社、2000年)より

【1988年の言葉から】

「目が点」：驚いた時の表現方法。漫画の手法として、人物が驚いたときに目を点で表現したことから始まった。同義語に<口がひまわり>、他に<目がハート>などがある。

【1989年の言葉から】

「オタク族」：パソコンやファミコン、ビデオ、アニメなど一つのことにのめり込んでしまう人間。評論家の中森明夫氏が言い出したというのが定説。

【1998年の言葉から】

「メル友」：<電子メール友だち>の略。PHSや携帯電話を使って電子メールをやり取りする友だち。

【1999年の言葉から】

「ため語」：相手が年上であっても、自分と同年代の者と同じような口のきき方をすること。<ため>は若者言葉で<友達>を意味し、もとは<ためになる>というヤクザ用語。

◆『日本難訓難語大辞典』(井上辰夫著、遊子館、2006年)より

【一入】 ひとしお

「一倍」とも書く。①染物と染液に一回浸すこと。②いっそう。ひときわ。

【二合半】 こなから

「小半」とも書く。①半分の半分、四分の一。②米・酒一升の二合五勺。

【加之】 しかのみならず・しかも

そればかりでなく。なおそのうえに。 (『浮雲』『初恋』)

【其文字】 そもじ

女房詞の代名詞。そなた。あなた。(『をこぜ』)

◆『日本語オノマトペ大辞典：擬音語・擬態語 4500』(小野正弘著、小学館、2007年)

【あっけらかん】：①意外な状況に直面したり、あきれはてたりして、放心状態にあるさま。②その場所にあるべきものがなく、だだっ広くあいているさま。③情趣や感興をわきたたせることもなく、空虚な印象を与えるさま。④当然あるはずの屈託やためらい、恥じらいといった感情がなく、平然としているさま。

【がちがち】：①かたいものが、何度かぶつかり合ってたてる重い音。②寒さや恐怖のためにひどくふるえて歯の根も合わないさま。③これ以上ないほどひどくかたまつたさま。

【さらさら】：①ものが軽くふれ合ってたてる、こまやかな音。②ものごとがすみやかに進むさま。③湿りけやねばりけがないさま。④何のわだかまりもないさま。

【はんなり】：はでなさま。明るく陽気ではなやかなさま。[方言]近畿地方・三重県。「この帯はんなりしたええ色どすなあ」(京都府) ※「華なり」が変化したという説、「はな(花・華)」に、状態を表す接尾語「り」が付いたものが撥音化したものとする説がある。

◆『日本語 語感の辞典』(中村明著、岩波書店、2010年)

あす【明日】：「きょう」の次の日をさす。「みょうにち」ほどは改まらず、会話的な「あした」よりは少し改まった感じの語。<あすの空模様>。漢字表記は「みょうにち」と読まれやすく、確実に「あす」と読ませたい場合は仮名書きが無難。

ふくれる【膨れる】：「ふくらむ」より若干会話的な和語。「ふくらむ」に比べ、均衡のとれない膨張をさす場合が多く、基本的に好ましくない感触で使われる。「ちょっと叱られるとすぐふくれる」、「予算がふくれた」。

ライスカレー：「カレーライス」をさす古風な和製英語。以前盛んに使われたが、次第に「カレーライス」のほうが一般的となり、その後、会話では単に「カレー」と言うことが多くなって現在に至っている。